



282号

2023/4

日中文化交流市民サークル'わんりい'  
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方  
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195  
<http://wanli-san.com/>  
Eメール:t\_taizan@yahoo.co.jp



溪流の傍らで一休みするギャロン・チベット族の少女（撮影時は中学2年生）：笑顔に東洋的な華やかさと芯の強さを感じられる通り、国立の演劇学校へ進学して女優になりました。芸名は尼瑪頌宋(ニマソンソン)で、日本にも紹介されています。

（四川省小金県 撮影：姑娘山自然保護区管理局特別顧問 大川健三）

'わんりい' 2023年4月号の目次は20ページにあります

この言葉、日本語でも「一頭地を抜く」などと言って、同じような意味を表しますが、私の持っている日本の四字成語辞典 3 冊には載っていませんでした。また、いつも引き合いに出す、中国語子供用絵本の四字成語辞典にもありませんでした。

・>・>・>・>・>・>

孟子は、中国戦国時代の有名な、孔子の教えを継承する思想家・教育者です。

ある日、彼の学生である公孫丑こうそんちゆうが彼に言いました：「先生は現在、多くの人から聖人として尊敬されていますね」孟子はそれに応えて言いました：「孔子のような人だって、自分を敢えて聖人だなどとは言わないのに、私が何でその気になれるものか！」

それを聞いた公孫丑は、多くの有名な人の名前を列挙して、言いました：「これらの人々の才能や品行も孔子とは比べものにならないと仰るのですか？」孟子は答えて言いました：「人類が現れて以来、孔子と比べられる人は誰一人としていないのだよ。皆同じ人間ではあるけれど、聖人の人徳と才知は、一般の人々にとっては遥かに遠く及ばないものなのだよ」

・>・>・>・>・>・>

**言葉の意味：**同類の中で、一際優秀な人のことを指す。

**使い方：**彼の能力は同年齢の人の中で、一頭地を抜いて素晴らしい。

・>・>・>・>・>・>

このお話は「孟子」公孫丑章句（篇）に出て来ます。公孫丑章句は、孟子と、弟子で齊の人・公孫丑との会話を集めたものです。孟子が齊の国に入り

宣王の師を志したが容れられず去るまでの間のことが、公孫丑との問答として書かれています。この言葉は、孔子のことを表現しているそうです。この章句にはまた、孟子が孔子の言葉として語っている、有名な、「千万人と雖も我往かん」や、四字成語としてよく知られた「拔苗助長」の話などが語られています。

孟子は、儒家思想の祖・孔子の時代から 300 年ほど経った紀元前 372 年に生まれています。中国は未だ戦国時代が続いていて、各国の国王は覇者たるべく、しのぎを削っている中で、儒家の思想はなかなか受け入れられませんでした。

そんな中でも孟子は臆することなく、国王は民の幸せを第一義とする仁政を行うべきだと説きました。魏の恵王が、隣接する秦や齊の侵略を受けて失った土地を取り戻したい、と相談した時、孟子は、「仁者無敵」と言って、武力で土地を取り返すのではなく、

国内に仁政を行うことで、人々の国を愛する気持ちを強め、侵略を受けた時、国民自身が国を守って戦うような国民を育てることが肝要だ、と説くのでした。

儒家思想と言えば、自分のことを顧みず、主家への忠誠を第一とみなす安定志向で、日本の封建制度を支えた思想と思われていますが、約 2300 年前の儒家の本流思想家は、主君の資格のない主君には、忠誠を尽くす必要はないと云い放ちます。主君が主君としての仁の心を失ったら、主家を去れ、同族の家臣は同族の中でよりふさわしい替わりの人間を主君に推すべきだと語っているのです。そのお話も、この公孫丑篇の中にあります。



挿絵：満柏画伯



姚燧の散曲一首〔越調〕憑欄人

ひょうらん じん

桜美林大学名誉教授 植田渥雄

中国古典詩の世界では「詩詞曲」という言葉がよく使われます。〈詩〉とは詩経、樂府、古詩、近体詩等、日本で漢詩と呼ばれる詩形の全てを含みます。〈詞〉はこれまでも何度か取り上げてきましたが、唐、宋以後に流行した詩形で、樂曲の歌詞に始まり、後に歌詞の部分が音樂から独立して特殊な文芸形式の一つとなったものです。〈曲〉とは元王朝時代に成立した所謂元曲のことです。元曲には二種類があって、その一つは〈雜劇〉と呼ばれるもので、現存する中国最古の歌劇です。京劇のルーツとも言われています。もう一つは〈散曲〉と呼ばれるもので、歌劇の中の歌唱の部分が独立し、〈詞〉の場合と同様、更に新しい文芸形式が生まれました。「詩詞曲」の〈曲〉とは主にこの〈散曲〉を指します。内容的には〈詞〉と同様、多岐にわたっていますが、その特徴の一つは、庶民性を色濃く残していることです。洒脱なユーモアと風刺性は、川柳や江戸小唄にも通じるものがあります。

作者姚燧(1238~1313)は金王朝下で生まれ、科挙制度の廃止された後の元王朝下で漢人官吏として要職を務め、名文家として活躍しました。同時にまた元代初期を代表する散曲作家でもありました。



姚燧像(百度百科より)

yuè diào píng lán rén  
〔越調〕憑欄人

jì zhēng yī yáo suì  
寄征衣 姚燧

yù jì jūn yī jūn bù huán  
欲寄君衣君不还

bú jì jūn yī jūn yòu hán  
不寄君衣君又寒

jì yǔ bú jì jiān  
寄与不寄间

qiè shēn qiān wàn nán  
妾身千万难

- \*越調=曲調の種類を表す言葉。
- \*凭欄人=樂曲の名称。
- \*寄征衣=旅ごろもを送る。これがこの作品の題名。「寄」は人に物を送る。「征衣」は旅ごろも。
- \*寄与不寄间=送ると送らないとの間で。
- \*妾身=私の身。私の心。「妾」は女性の謙讓語。男性の場合は「僕」。
- \*千万=とても。
- \*难=難しい。

〔訓読〕

えつちよう ひょうらん じん よう すい  
〔越調〕憑欄人 姚燧

ころも かい  
君に衣を寄せんと欲するも君は還らず

ころも ま  
君に衣を寄せざれば君は又た寒からん

よ よ  
寄すると寄せざるとの間にて

しょう せんばんかた  
妾の身は千万難し

〔和訳〕

旅ごろも、あなたに送ってあげたいが  
送ってあげても帰りはすまい  
送るのよせばまた寒かろう  
送ってあげよか送るのよそか  
わたしほんとに困ってしまう

## 孟郊の『游子吟』

報告: 花岡風子

今日のお題は中唐の詩人孟郊もうこうの『游子吟』という古詩で、孟郊の作品の中では有名な作品です。「遊子」とは旅人のことです。これから旅に出ようとする息子が母のことを想って詠んだ詩です。私は孟郊と聞いて直ぐに孟母のことをイメージしたのですが、孟子とは時代が違い、孟郊は中唐の裕福な家の出でした。若い時は仙人に憧れ、隠遁生活を送っていたそうですが、四十を過ぎてから母親に科挙を受けるように諭され、二回落第して三回目に合格するという経歴のある人でした。「科挙の試験は毎年あるわけではなく、三年に一回位だから、十年くらいかかっています。三回目に合格した時は五十近くになっていて、今の感覚でいうと十浪したくらいの感じでしょうね」と植田先生。

科挙に及第した孟郊は、地方官の地位を得ますが、貧しく、役人としては不遇な人生だったそうです。「性格が〈狷介〉であったそうですが、今の言葉で言うと、真面目、頑固、意固地、協調性なし、空気読めない人。こういう人は良い仕事をやるかもしれないけど、悪い事しないから、出世しないんですよ」という植田先生の言葉に会場から笑いが溢れました。

孔子の言葉に「狂狷」というのがありますが、「狂」は進取の精神、「狷」は有所不為（してはいけないと思ったことは絶対にしない）という意味があり、どちらにしても人付き合いが悪いのですが、やたらと人付き合いの良い人よりも孔子はむしろこういう人を好んだそうです。

では、詩の内容を見ていきましょう。この詩は、五十近くになってやっとお役人になり、赴任地に母を呼び寄せる時に書いたとも言われているそうです。

cí mǔ shǒu zhōng xiàn yóu zǐ shēn shàng yī  
慈母手中线 游子身上衣  
lín xíng mì mì féng yì kǒng chí chí guī  
临行密密缝 意恐迟迟归  
shuí yán cùn cǎo xīn bào dé sān chūn huī  
谁言寸草心 报得三春晖

じぼしゅちゆう せん  
慈母手中の線

ゆうし しんじょう い  
遊子身上の衣

こう みつみつ  
行に臨んで密密に縫う

ちち  
意は恐る遅々として帰らんことを

すんそう  
誰か言う寸草の心

さんしゅん き むく  
三春の暉に報い得んと

慈母は手にした糸で、

これから旅に出る人の衣を縫っている。

出発が迫っている時、

念入りにしっかりと縫い上げている。

帰りが遅くなることを恐れつつ、

早く帰って欲しいという気持ちを込めて縫ってくれている。

どうして小さな草が三春(初春・中春・晩春)の太陽に報いることができるだろうか。

「密密」は、その次の「遅遅」と対になっています。「密密というのがお母さんの愛情を見事に表現していますね。この言葉だけで涙が出そうになりますね」と植田先生。旅に耐える衣に仕上げようと、細かい目でたくさん針を入れるお母さんの姿とその心。「早く帰ってきてね」「無理はしないで」。母の子供を思う気持ち、それをひたすら針と

糸に込める母心。「我々男はね、母の気持ちが分かる頃には、母はもうこの世にいないことが多いんですよ」と植田先生。この詩は「だから親孝行しよう！という具合に、親孝行の奨励みたいに使われることもあるけれど、実際は親に苦労ばかり掛けてきた息子の後悔の表れとも言えますね。だからこそこの詩には説得力があるのですよ」。それを聞いて、出席の男性陣は深く頷いておられたようです。

植田先生はさらに続けて『『誰か言う寸草の心、三春の暉に報い得んと』、最後のこの二句は特に有名です。小さな草の芽にまで春の太陽が無償の愛を降り注いでくれる、その光の恩に到底報いることなどできない。だから大きな母の愛の前に、親孝行などと軽々しくいってほしくない。これが作者の本音でしょう』と。

「寸草の心」と「三春の暉」。小さな心に降り注ぐ大きな愛の光。これがまた見事な対をなしていますね」。

最近私が好んで読んでいた史鉄生の『我与地坛』にも、二十歳で突然半身不随になった青年が、狂気の時代を経て、有名作家になる前に亡くなってしまった母への想いのたけが切々とつづられています。息子にあれこれ言いたい気持ちをグッと内に秘めて、黙々と今自分が息子に出来ることに徹する母心の偉大さは、本当に簡単に恩返しできるようなものではありません。

生きているうちに母の気持ちを理解するどころか、母を悲しませた多くの記憶と共に、後悔と恋慕が入りまじった深い感情は、古今東西、男も女も程度の差こそあれ、似通ったものなのではないでしょうか。

さて、こちらの漢詩の会は最後に先生との交流タイムがあります。今回ある参加者の方から「中国の漢詩からは勇気をもらえる。例えば、蘇東坡

が流刑に何度遭っても、終始一貫して常に前向きだったことを、今の日本の人達に伝えたいと思う。ちょっと会社で左遷にあったくらいで意気消沈するな、と伝えたいですね」というご感想がありました。それに対して植田先生は、次のようにおっしゃいました。

「漢詩の世界は生きる力に溢れていますね。受験勉強一つとっても中国は半端ないですよ。科挙の試験も、カンニングを防ぐためにトイレすらない過酷な環境の中で行われたようですから、中国人の根性も半端ないですね。また、中国人は何をやってもスケールがデカイとも言えますね。科挙制度も宦官制度も取り入れなかったというところに、むしろ日本人の日本人らしさがあると言う人もいます。徹底した男性社会の中で、立身出世のために男性でなくなるということをやったのが中国人です。身を削るほどの勉強をして科挙に合格するか、文字通り身を削って宦官になるか。文字通り身を削った宦官のパワーとエネルギーは、ことの善し悪しは別として、相当に強大だったですよ……。ところで宦官といえどかく否定的なイメージが付きまといますが、中には皆さんご存知の、歴史に名を残した立派な人物もいます。話が少し横道にそれてきたようですね。この話はこの辺にしておきましょう（笑）」。

私自身はなぜ漢詩を学び続けているのか、と考えてみますと百年、千年と読み続けられている言葉からパワーと美しさを感じるだけでなく、時空を越えて詠み人の見た風景、感情が伝わってきてタイムスリップしたようなとても親しみを感じる気持ちになれるから、です。

今回の主人公孟郊の母に対する純粋な想いは、世代を超えて国を超えて、目には見えないけれど、読者の心にそっと火を灯してくれるエネルギーがこもっている気がします。

## 「二七大ストライキ」百周年

文と写真=村上直樹

2月21日から3月3日まで中国文化センターで青磁の展覧会が開催されたので覗いてみた。この展覧会は宋朝の汝窯（所在地は現在の河南省平頂山市汝州市）の伝統を受け継ぐ現代の作品を揃えたものである。点数は多くないものの「一切の装飾を排して形そのものの均整美に徹した造形手法と、天然の玉の色あいにとどこまで迫れるかを人工的に追求した釉薬の微妙な輝き」（小島毅『中国思想と宗教の奔流』2005年、講談社、15頁8-9行目）をじっくり鑑賞できた。ただ、惜しむらくはこの展覧会のパンフレットの日本語（訳）がかなり間違っていた（この点は同センターの担当者もチェック不足を認めていた）。たとえば、明らかに「宋王朝」とあるはずが「歌王朝」となっている（お分かりになりますか？ 宋→song→歌ですね。原文が英語でそれを機械翻訳にでもかけたのでしょうか？）。

それはさて置き、宋（北宋）が栄えたのは1000年ほど前であるが、今回は時代を一気に下って今からちょうど100年前の出来事を取り上げたい。河南省の省都・鄭州市には鉄道の鄭州駅からほど近い旧市街地の中心部に商業施設に囲まれた広場（二七広場）があり、そこに写真のような2本1組の塔が立っている。1923年2月4日から7日に行われた「二七大罷工」（二七大ストライキ）の記憶を保存する「鄭州二七罷工記念塔」である。高さ63メートル、14階、断面が各五角形の鉄筋コンクリート造りで、1971年に建てられた。



「二七記念塔」（2014年11月）

今年が百周年となる「二七大罷工」とは何か、程有為他編『河南通史』（第四巻）2005年、河南人民出版社、などを参考に少し調べてみた。時代を遡ることさらに10年余り、1911年の辛亥革命を経て1912年1月1日に中華民国が成立した。同年2月12日には愛新覚羅溥儀が退位して清朝が滅亡し、統一政府としての北京政府（北洋政府）も始動した。しかし実態は全国統一とは程遠く、その後も、とくに1916年に袁世凱が死去してからは軍閥が群雄割拠する状態にあった。その中で一時期最強を誇ったのが呉佩孚（1874年生～1939年没）率いる直系軍閥である（北洋軍閥の一系統であり、その領袖の多くが直隸省——ほぼ現在の河北省に当たる地域、の出身であるためこの名称で呼ばれる）。1919年5月4日には北京で、日本による「対華21ヶ条要求」が第一次世界大戦後のパリ講和会議でも追認されたことに憤慨した大学生がデモを敢行し北洋政府の軍警（軍隊と警察）に鎮圧されるという「五四運動」も起こった。

一方、1921年7月には上海で中国共産党が正式に設立されその影響が全国的に広がりつつあった。河南省でも今に至る交通の大動脈、京漢鉄道と隴海鉄道を中心に労働組合の性格を持つ「鄭州京漢鉄路工人俱樂部」、「隴海鐵路開封老君会」、「洛陽隴海鉄路同人俱樂部」などの組織が次々と結成された。同年12月には中原地域における最初の党組織としての「中共洛陽組」も設立され、共産党の指導のもと労働運動が本格化する機運が醸成されていった。

中国大陸を東西に結ぶ隴海鉄道はもともと清朝末にベルギーとフランスの借款によって建設され、両国の資本家が軍閥と組んで中国人労働者を低賃金で長時間働かせていた。それに対する労働者の不満は次第に高まり、ある不当解雇事件をきっかけとして1921年11月20日に全線での大ストライキに発展した。この隴海鉄道ストライキは当局が労働者の要求を受け入れて労働者側の勝利に終わった。

つづいて、鉄道労働を巡る闘争の場は中国大陸を南北に北京と湖北省武漢の漢口を結び隴海鉄道とは鄭州駅で交わる京漢鉄道に移ることになった。京漢



鉄道はやはり清朝末に外国からの借款により建設され、1909年1月に中国（清政府）がその経営権を握るようになっていた。この鉄道は呉佩孚にとっても非常に重要な戦略的意義を持っており、軍閥の主要な収入源となっていた。この沿線の各駅に労働組合が続々誕生し、呉佩孚は労働者の団結意識が強まり労働運動が激しくなることを警戒していた。

そうした中で労働者側はいよいよ総労働組合を設立しようということになった。1923年2月1日に沿線各地の労働代表が鄭州に集まり、会場となる「普樂園」劇場を目指して「勞工神聖」と書かれた額を担いだ行進がスタートした。しかし、途中で政府の軍警に包囲され行く手を阻まれてしまう。労働者たちはそれでも必死に頑張り会場入り口で「京漢鐵路总工会成立大会万歳！」「労働階級勝利万歳！」と宣言することができた。この「普樂園」劇場のあった場所には現在「二七大罷工」を記念するもう一つの建物、「二七記念堂」が立っている。

予定どおり設立宣言は出せたものの、代表団は身の安全のため鄭州から江岸（漢口）に移ることを余儀なくされ、当地で開いた会議で2月4日に大ストライキを挙行すると決めた。鄭州では午前9:00から、江岸では10:00から、北京の長辛店では11:00からと順次ストに入り、正午には全線でストライキに突入する計画である。実際にストに入ってから速捕者も出るなど呉佩孚らによる激しいスト潰しに労働者側も必死に抵抗を続けるが、2月7日ついに軍警による武力鎮圧が断行され多数の犠牲者が出る事態が発生してしまった。世に言う「二七惨案」であり「二七大罷工」による抵抗運動を象徴する惨劇である。

こうして残念ながら大ストライキは労働者側の敗北に終わってしまった。しかし、中国の革命史におけるその意義は重大であり、不屈の抵抗を示した「二七精神」は学ぶべきものとして今に語り継がれている。河南省に関係する革命精神としては「紅旗渠精神」、「大別山精神」（以上、「雑感」2021年12月号を参照されたい）、「焦裕禄精神」（「雑感」2020年5月号）に並び称される。

現在、鄭州市の中心市街地には行政単位として「二七区」があるが、これは全国で唯一革命史上の重大事件に因んで命名された区だそうである。また、百周年



二七スト百周年記念はがき（『個人図書館』2023年3月4日より）

を記念して中国収蔵家協会・鉄路文化収蔵協会が3枚一組の記念はがきを発行した（『個人図書館』2023年3月4日より）。図柄はストの拠点となった長辛店の「二七記念館」、鄭州の「二七記念塔」（写真参照）および武漢の「二七記念碑」である。

最後に、現在の「二七記念塔」の前身は高さ15メートルの木造であった。公式には、1950年代に鄭州市で開かれた河南省の物資交流会（日用物資の取引市場。庶民の間で「騾馬（ラバ）大会」と呼ばれていた）のシンボルとして建てられた。その場所が二七大ストライキの指導者が処刑された「長春橋」付近（ここが現在の「二七広場」）であったため、のちに「二七塔」と呼ばれるようになり政治的意味合いを持つようになった、と説明されている。つまり建造時点では二七大ストライキとは無関係であった。

しかし、この説には異論もあるようだ。『大河報』電子版（2020年7月21日）には考証記事が出ており、そこには初めから「二七大罷工」を記念するために木製の塔が建造されたが、その塔に「発展経済、保証供給」という標語が書かれていたことから物資交流会のためのシンボルと誤解された、という説が紹介されている。一方、実は1951年に物資交流会が開かれた当時は鄭州市が財政不足でシンボル塔を建造することができなかった。その後物資交流会で余った木材を使って初めから「二七大罷工」（犠牲となった「二七烈士」）を記念する目的で塔を造ったという元鄭州市長の王均智氏による証言もある（王氏は2020年時点ですでに105歳の高齢だった）。いずれにしても真相は依然はっきりしないようである。初めからか、後からか、などなど百周年を機にこちらの究明も進むことを期待したい。

## 中国の面白い神話物語・伝奇物語 (22) 一風塵三俠一

顧傑

皆様、お久しぶりです。

今回は、次号からお話しする「虬髯客伝<sup>きゅうぜんかくでん</sup>」を理解しやすくするため、主人公三人「風塵三俠<sup>ふうじんさんきやう</sup>」(俠客三人衆)を紹介したいと思います。

風塵三俠は、隋末から唐初にかけての俠客三人衆です。一人目「虬髯客」(ニョロニョロ曲がっている髯が持つ人)、二人目「紅拂女<sup>こうふつじよ</sup>」(手に赤い拂塵<sup>ぶっせん</sup> [拂塵<sup>fú chén</sup> 注1])を持つ女性)、三人目「李靖<sup>りせい</sup>」(唐初にいる将領)をモチーフにした民間説話です。「風塵三俠」の三人は、動乱の時代を迎えて、国に尽くしたい李靖、独立かつ賢い紅拂女、野心家の虬髯客と、三様に性格が異なります。

彼らは後に李世民(唐の開国皇帝)と出会い、彼が高貴な人物であることを知り、彼の成功に手を貸す物語になります。

この民間物語から、杜光庭<sup>注2)</sup>という人が《虬髯客伝》を書きました。

### 【虬髯客】

本名は張仲堅、隋末の張の家から第三の子として生まれました。髯がニョロニョロとした龍のようだったことから「虬髯客」と呼ばれています。もともとは揚州一の富豪の子でしたが、父親が醜い子だと思い、生まれた時に殺そうとしたと言われています。幸い、「崑崙奴」(以前お話もしました奇人)に救われ、弟子になりました。元々野心家でしたが、李世民を見た虬髯客はその人格に魅了され、これからの天下は李のものだと思いました。紅拂女に好意を持ちますが、李靖と結婚したことを知ってから、3人は兄妹となり、家財を李靖とその妻に託してから一人旅立ちました。海国である扶余に入り、部隊を組織し、その政権を滅ぼして自分が皇帝になったと

言われています。扶余王国は朝鮮半島北部にあり、北魏の時代に滅ぼされたことが唐代全伝に記載されています。朝鮮三国時代の高句麗と百済の王家は、いずれも扶余の出身だと言われています。これは百済が「南扶余」を名乗っていたので、そのことを指しているのでしょう。王が島国の領主であった可能性もあるし、72の島の領主であったといわれる朝鮮半島に近い島国であった可能性もあります。

### 【李靖】

李靖(571年～649年)は実在人物で漢族。永州三元(現在の陝西省三原県北東部)出身です。隋末から唐初にかけての将領で、唐代では文武両道で有名な軍事家です。後に衛



唐の名将、李靖・『清宮殿蔵本』

(ウィキペディアから)

に功名のある人)とされ、李衛公と呼ばれるようになりました。李は兵を率いることに優れ、謀略にも長けています。もともとは隋の将軍でしたが、後に唐に仕え、南は蕭銑<sup>しょうせん</sup>(唐の南にいる領主。唐から独立しようとした)を制圧し、北は東突厥汗国を滅ぼし、西の吐谷渾を滅亡へ導くなど、唐の建国に貢献した。死後、景武と呼ばれ、昭陵(唐皇帝の陵墓)に共に葬られることが許されるほどでした。彼はいくつかの軍記物を著しましたが、そのほとんどは失われています。



李靖は韓当主の甥で、野心に満ちた明るい青年でした。長安の楊素に会いに行き、軍政を相談しました。しかし、楊素は年老いて体が弱く、もはや野心もなく、現状に満足しているだけでした。李靖は非常に失望しました。その後、夜中に紅拂女と出会い天下への野望を語り、道中で虬髯客と出会い、三人兄弟になりました。そのあと李世民を知り、李世民の擁立に貢献しました。

### 【紅拂女】

紅拂女は元々張家の娘で、名前は出塵といいます。彼女の父は陳朝の将軍でしたが、隋の将領に殺されました。母は隋の皇帝・楊堅により楊素に渡されました。紅拂女の母は楊素の家で宮廷女官となり、紅拂女も楊素の家で成長しました。そのあと、楊素の家で歌姫になり、赤い拂塵(拂<sup>ぶっ</sup>塵<sup>ちん</sup>) (画像をご参照ください) をもっていることで「紅拂女」と呼ばれることになりました。

後に風塵三侠に呼ばれた三人の中には、李靖という才能ある者がいて、兵法や戦略に精通し、大きな野心を持っていました。長安で最初は楊素を訪ねましたが、話してみると有能な人物であることはわかりましたが、既に年老いて体が弱く、もはや野心もなく、ただ現状に満足していました。がっかりした李靖を見て紅拂女は、李を



拂塵：払子 (蘇寧易购から)

英雄的で侠気のある男だと思い、部下に後を追わせ、彼の住処を突き止めました。

夜、李靖は一人で庭に座り、昼間に起こったことを考え、自分の将来に不安を感じていました。そこへ紅拂女が訪れ、自分が李靖の仲間になって、彼の未来に同行してほしいと告げました。李は大喜びでしたが、楊素にどう説明したらよいか心配しました。楊素は高齢でもうものがわからなくなるぐらいになっており、逃げ出した者は少なくないと、紅拂女は説明して、安心させました。

李靖は、自分を理解してくれて、人生を捧げてくれる美しい女性がいることに安堵しました。楊素は紅拂女が見つからないことに、数日間人を派遣して調査させましたが、結局そのまま事が過ぎました。それを見て、紅拂女と李靖は商人に変装して長安を後にしました。

次号からは、「虬髯客」の物語を語ろうと思います。しかし仮想の人が多く、李靖だけは歴史に実在する人間ではありますし、三人が民間ではグループとされていました。

そのため、まずそれぞれを紹介させていただきました。

いかがでしょうか？

もし面白いと思われましたら、ぜひ次の「虬髯客」を楽しみにしてください。

よろしく願いいたします。

### ■注(ウィキペディアから)

- 1) 拂塵：日本では払子(ほっす)といい、本来は、インドで蚊や蠅など虫を追い払うために使われた道具であった。中国の禅宗で煩惱を払う法具として用いられるようになり、道教でも用いられた。
- 2) 杜光庭(とこうてい)：850年～933年は、唐末から五代十国時代にかけての著述をよくした道士。

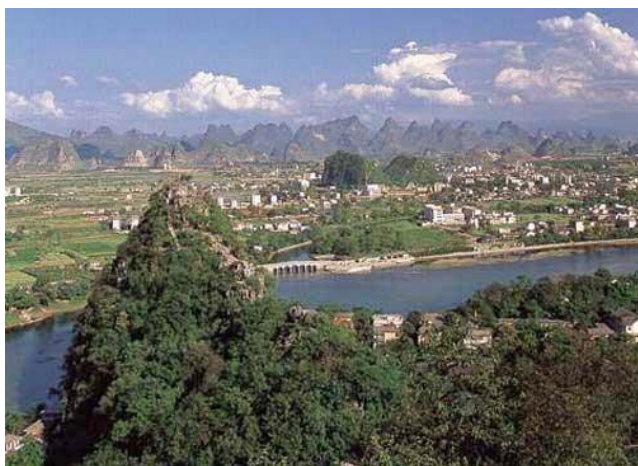
## 風洞山(桂林)

訳：一瀬靖子／大槻一枝

桂林市の北側に、景色の美しい<sup>じょうさい</sup>畳彩山がある。この山の五つの峰は、地中から頭を擡げた筍のように、あるものは高く、あるものは低く、またあるものは大きく、あるものは小さい。主峰の名月峰はこの一帯の最高峰で、南には、美しい石段が頂きまで続く、こぢんまりとした越山があり、頂からは眼前に漓江の景色が大きく開ける。西南側の四望山は、禿げ頭で腹が出っ張った羅漢が日光浴をしているようだとされている。北側の仙鶴峰は白鶴洞とも呼ばれ、峰には畳彩門があって、門を入るとたちまち絶壁に向き合う。高い崖の下、ガジュマルの葉に覆い隠されたところは、ヒョウタン形となり、南北に穿った石洞があって、洞の中は涼風が吹き抜け、六月の暑い盛りでも、ここに長く立っていると、寒ささえ覚えるほどである。人々はこの山を風洞山と呼び、洞を来風洞と呼んでいる。洞穴の成り立ちについては、次のような話が語り継がれている。

~~~~~

伝えられるところによると、昔昔、畳彩山の上に大きな寺があった。寺には三百人もの和尚が住んでいて、その中に孟風と言う和尚がいた。体つきは頑丈で、力は大きな鼎(中国古代の銅器。古くは煮炊きに使われた)を持ち上げられるくらい強い。



畳彩山と漓江(百度百科より)

しかも彼は気立てがよく優しくかったので、皆彼に様々な仕事を頼んだ。彼はなんでも気安く引き受けてくれたので、人々は、茶を沸かし、飯を炊く、と言った火を使う仕事をことごとく彼に押し付けた。孟風和尚は黙ってそれらを引き受け、文句の一つも言わない。

この地方は人の往来が多く、山に登って観光する者、仏に線香を上げに来る者、神仏に願いを託すものなどなど、朝早くから晩暗くなるまで、人々の列は蟻の引越しのよう引きも切らない。茶や水を求める者、うどんや精進料理を求める者が数知れず、孟風和尚は朝から晩まで水を汲み、飯を炊き、茶を沸かし、香を焚く。独楽のように駆け回り、一刻の休みも取れない。六月の一日は蒸し窯の蓋を取ったように暑い。かまどで火を焚く孟風和尚の顔には、豆粒のような汗が流れ、まとった袈裟は汗水にまみれて乾く間もない。

この日は寺を訪れる人が特に多かった。孟風和尚は沸かした茶を桶になみなみと汲んで担ぎ、山腹のあずまやに届けようと出かけた。途中彼は下山する白髪の老人に出会った。老人は彼の前まで来ると突然よろめいて、孟風和尚にぶつかり、彼を突き倒してしまった。孟風和尚の着物は引き裂かれ、二つの桶も衝撃を受けてタガが外れ、十八片の桶板に崩れてしまった。幸い熱い茶でやけどをすることは免れたが、老人は孟風和尚の体の下敷きになり起き上がることもできない。孟風和尚は急いで身を起こし、老人を助け起こして、

「ご老人、お怪我はありませんでしたか？ お怪我をされていたら、私の背中に乗ってください。すぐ医者に参りましょう」

老人は和尚の態度に感じ入って言った。

「和尚さん、私の不注意であなたを突き飛ばしてしまい、衣もずたずたに引き裂き、桶もバラバラ





叠彩山山頂(百度百科より)

にしていきました。お金で償った方が良いか、それとも物でお返しした方が良いのか、どうぞ遠慮なく言ってください。必ず弁償します」

孟風和尚は慌てて、

「壊れた桶は自分で直せます。着物の破れも繕えます。どうぞ心配なさないでください」

老人は穏やかに、

「貴方のものを壊して、何もしないでは私の気がすみません。貴方のほしいものは何でも用意します」

「私は何もほしくありません。ただここは六月の暑さが特に厳しく、遊覧する人、お参りする人は皆とても大変です。もう少し涼しくなればどんなに良いかと思っています」

老人はこれを聞くと、笑みを浮かべて静かに立ち去った。

この夜、孟風和尚は仕事を終え部屋に帰るとすぐ、うつらうつらと眠ってしまった。と突然、昼間ぶつかったあの老人が、衣服を持って彼に近づいてきて言った。

「今日は貴方の着物を引き裂いてしまいました。これは上等ではありませんが、貴方が着て下さればきっと良いことがあるはずです」

孟風和尚は、「人から着物や金銭・財産を貰ったら、何かお返しをしなくてはなりません、私には何もお返しするものはありません。却ってあなたを転ばせてしまい、私の方がお詫びをしなくてはいけないのです。あなたから頂きものをするな

んて、とんでもないことです」と断りました。

老人はこれを聞くと突然怒りだし、

「あなたは他人の気持ちが分からない人だ。私の気持ちが受け取れないなら、これまでだ」

と言うが早いか、持っていた着物を、いきなり目の前にそそり立つ崖をめがけて投げつけた。激しい轟音と共に山も地も大きく揺れ動いた。孟風和尚は浅い眠りから目覚め、不思議に思って崖に走り寄ると、おや？ 崖に大きな穴が穿たれ、そこから冷風がヒューヒューと噴出して来る。その気持ちのよいこと！ 牛魔王が冷扇で扇いでいるようである。孟風和尚は嬉しさのあまり満面に笑みをたたえた。この時、やっと昼間自分にぶつかったあの老人が仙人であったことを知った。彼は洞に涼風がサーッと吹きぬけるのを見て、しばらく涼もうと洞窟の入り口に這い上がり、石の上に横たわると、あまりの心地よさに眠ってしまった。

翌朝、太陽はすでに高く昇ったが寺の鐘は音も立てず、炉には香も焚かれず、厨房の火も熾きていない。寺の和尚らは何かいつもと違うのを感じた。孟風和尚が疲れて起きられないのだろうと彼の部屋を探してみたが、部屋に人影はなく、厨房、茶房にもいない。最後に切り立った崖の方を望むと、そこには洞が開き、涼風が洞から噴き出している。そして洞の前の石台には口を大きく開けて楽し気に微笑む和尚が眠っているのを見つけた。人々は、孟風和尚は石の仙人と化し、風洞は孟風和尚が老人に求めた“涼風”によってできたのだと知った。

風洞が現れると山へ遊びに来る観光客がさらに増えた。この涼風に吹かれると、その後七日間は暑さ知らずだと言われる。涼風に吹かれた者は洞口で手を伸ばし、石の羅漢と化した孟風和尚を撫でた。羅漢は人々に撫でられてつるつるになり、青光りを発するようになった。人々は、腹が痛めば、石羅漢の腹を撫でるとすぐ痛みが去ると言う。李肇隆/郭金良/秦煥芝、編著、『桂林山水的伝説』、漓江出版 2007 年、より



## シューマンとメンデルスゾーン（2）

和田 宏

シューマンの父親は、書籍販売・出版業を営み、本も書いたりしていたので、その影響からシューマンは、文学的な素養もあって作曲だけでなく、1834年から、『新音楽時報』という隔月刊の音楽評論雑誌を創刊し、10年近く主宰した文学者でもありました。“諸君、脱帽したまえ、天才が現れた！”とショパンを讃えるなど、多数の音楽評論を書いて、同世代のショパンやベルリオーズを、後にはブラームスを称揚して世に知らせました。また、行方不明になっていたシューベルトの交響曲第8番「グレート」の楽譜を発見してメンデルスゾーンに送り、1839年3月21日、メンデルスゾーンが初演しました。

シューマンは、クララと二人で歌曲集を沢山作りましたが、“交響曲を作らないと、後世に名を残す作曲家にはなれないわよ！”と、クララから叱咤激励を受け、やっとこさっとこ、交響曲を4つ作りました。それらの交響曲を聴けば、いずれも立派な曲と思われ、バッハ、ベートーヴェン、ブラームスを「3大B」と言いますが、シューマンもベートーヴェンの正統な後継者の一人だという事が判る筈です。

1841年2月に作られた交響曲第1番には『春』、交響曲第3番には『ライン』という副題もついています。私が一番好きなのは、連打するティンパニーと、ほかの全ての管弦楽器が競い合うように鳴り響いて締め括る交響曲第2番です。

このほか、「ゲノヴェーヴァー序曲」、「ツヴィツカウ交響曲」、「4本のホルンのための管弦楽」という名曲もあります。シューマンは、3歳年下のワーグナーと付き合いはありましたが、目指す音楽が異なっており、反感さえ持っていたので、二人の仲は深まりませんでした。

### <万能の貴公子メンデルスゾーン>

ハンブルク生れで、シューマンより1歳年上のユダヤ人のヤコブ・ルードヴィヒ・フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディー（1809.2.3

～1847.11.4 享年 38）は、哲学者の祖父、銀行家の父、作曲家の姉ファニーを持ち、裕福な家庭に育ちました。幼少期から優れた音楽の才能を示した神童です。

14歳で交響曲第1番を、17歳で「夏の夜の夢序曲」をそれぞれ作曲しています。1835年、26歳でライプツヒ・ゲバントハウス交響楽団の指揮者になり、34歳でライプツヒ音楽院を創立しています。

メンデルスゾーンは、ユダヤ人の家系であったため、謂れなき迫害を受けることが多く、ユダヤ教徒からキリスト教のプロテスタント教徒（ルター派）に改宗しました。それでも、双方からの誹謗中傷は止みませんでした。メンデルスゾーンは、そのような状況にもめげず、交響曲5曲をはじめ、協奏曲、ピアノ曲、室内楽声楽など全部で750曲以上を作っています。メンデルスゾーンの業績と影響力は多大で、終生ドイツ音楽界の重鎮として君臨しました。

昔は、オーケストラには指揮者はおらず、コンサートマスターと呼ばれる第一ヴァイオリンの一番前に位置する奏者が、弾いている弓を使って合図していましたが、現在のようにステージの中央に置かれた指揮台に上がってタクトを振ったのは、メンデルスゾーンが最初、つまり、彼がオーケストラ指揮者の元祖なのです。同時代の作曲家たちは、自分の作品をメンデルスゾーンに演奏してもらおうと切望したに違いありません。

ロマン派の作曲家としてだけでなく、多くの言語に通じ、青年になる頃にはドイツ語のみならず、ラテン語、イタリア語、フランス語、英語を話しました。また、ルネサンス時代の美術、文学、哲学に精通し、詩作や絵画製作も行いまし



メンデルスゾーン  
1839年に描かれた肖像画  
(ウィキペディアより)



メンデルスゾーンの描いた『ルツェルンの眺望』(ウィキペディアより)

た。「天は二物を与えず」という諺がありますが、メンデルスゾーンは、音楽の他に絵画の才能もあり、天から二物を与えられた人です。スイスの風景を描いた『ルツェルンの眺望』という水彩画をはじめ、沢山の作品を残しました。

シューマンの良き理解者であり、お兄さん役でもあったメンデルスゾーンは、シューマンが作曲した交響曲第1番『春』を、1841年3月31日、ゲバントハウス管弦楽団を指揮して初演奏しました。コンサートは大成功を収め、シューマンの名はヨーロッパ中に響き渡りました。

### <交響曲5番『宗教改革』>

メンデルスゾーンは、1830年に行われるマルティン・ルターの宗教改革300周年記念祭で発表しようと交響曲第5番『宗教改革』を作曲しました。この曲は、当初、懸賞付き作曲コンクールに応募した作品ですが、彼がユダヤ人だったため受賞の対象者から外されてしまいました。ゲルマン人やアングロ・サクソン系のヨーロッパ人の中には、お金を扱う仕事は卑しい者のすることだと蔑む偏見がありました。ユダヤ人が算盤勘定が速いことや金融関係機関の要職を占めていたりしたことから、“ユダヤ人は守銭奴だ”とか“ユダヤ人は国家のない放浪者”とか“キリストを死に追いやったのはユダヤ人だ”などと難癖を付けていたのです。1936年ナチス・ドイツと「日独防共協定」を結んだ日本でも、戦前はユダヤ人のメンデルスゾーンの曲が演奏される機会は殆ど無く、第二次大戦のあとの1960年代になって、漸く演奏されるようになったのです。

### <ルターの『神は我がやぐら』>

交響曲第5番『宗教改革』の第4楽章には、ルター自身が作詞作曲したと伝えられるコラール『神は我がやぐら』(=Ein feste Burg ist unser Gott)のメロディーが出てきます。出だしはフルートのソロで奏でられ、コーダでは力強く壮大に演奏されて全曲を締め括ります。ローマ教皇レオ10世やカトリック教徒から迫害を受けたルターは、断固として自身の信じるところを変えず、この『神は我がやぐら』を歌いながら、カトリック側の弾圧をはね返しました。「宗教改革の戦いの讃美歌」と呼ばれ、ルター派やプロテスタント達に最もよく歌われる愛唱歌の一つです。私は日々の暮らしの中で、辛いこと、面白くないこと、思うように行かないことにぶつかった時、この『神は我がやぐら』を口ずさむことにしています。

♪神は我がやぐら 我が強き盾 苦しめる時も  
近き助けぞ おのが力 おのが知恵も 頼みとせる  
陰府の長も など恐るべき

メンデルスゾーンには4歳年上の姉ファニーがいました。彼女も600近い曲を作曲し、優れた音楽家だったものの、両親から出版を反対されたため、一部は弟フェリックスの名前で出版されました。当時、女性が作曲すること自体が憚られていたのです。ワーカホリック気味のメンデルスゾーンは、敬愛していたファニーが脳卒中で1847年5月14日に41歳で死去したことに大きな精神的打撃を受けて立ち直れないまま、半年後の11月4日に、同じく脳卒中で倒れ、ファニーの居る天国に向かったのです。享年は38歳、葬儀ではシューマンらが棺に連れ添いました。

### <ブラームスの登場>

日本では、1853年7月8日(嘉永6年6月3日)、『泰平の眠りを覚ます上喜撰 たった四杯で夜も眠れず』と狂歌に歌われた、マシュー・ペリーの率いる黒船4隻が横須賀市浦賀沖に現れたのですが、その同じ1853年の10月1日、銀杏の葉が散り始めたライン川畔の町・デュッセルドルフのシューマン家のドアを叩く青年がいました。彼がヨハネス・ブラームス(1833.5.7~1897.4.3 享年63)でした。 つづく

## 「秦皇島」から「承德」へ

# 「避暑山荘・外八廟」 駆け足旅行（1） 文と写真 吉光 清

秦皇島から日本に帰るには、“どうせ北京経由になるのだから、何処かを經由して北京に着いても同じことだ”と考え、秦皇島市の北にある承德市に立ち寄って帰ろうと思い立ったのは、5度目の秦皇島訪問の少し前のことだった。

情報源は手持ちの「地球の歩き方-北京」のみ。「北京市内のホテル」に続いて「北京からの小旅行」という特集に取り上げられ、天津と並んで紹介されていた5ページ分の記事だった。それでも、清代の皇帝が夏の間、政務を執った離宮があり、ラサのポタラ宮の縮小版の趣を持った寺院群があるということで大いに興味を惹かれた。

それに拠れば、承德市は北京の北東 230 キロに位置し、北京市内の長距離バスのターミナルからはバスが 40 分に 1 便、所要時間 3 時間 30 分で結んでいて、鉄道を利用するより便利とあった。それならば、逆方向のバスで北京に向かっても不便なことは無いだろうと考えた。

マイレージを利用して国際便往復の手配、秦皇島市内のホテル、帰国便に合わせた北京空港近くのホテル予約に、承德市内のホテル予約を加え、細かい計画無しの旅に出発したのは 2018 年 6 月 21 日であった。

### ■承德市と世界遺産

瀋陽に都を置き、「後金」を興した女真族（満州族）の王朝が、第 3 代順治帝の時代に国名を「大清」に改め、明の衰退に乗じて「山海関」を越えて、北京に入り、260 年余り続いた「清王朝」を作り上げた。

第 4 代康熙帝が、瀋陽に里帰りをする度に立ち寄り、夏でも涼しく、風光明媚な地として知られていた「熱河（承德の旧称）」に「避暑山荘」の造営を開始し、雍正帝-乾隆帝に引き継がれ 1790 年に完成を見た。康熙帝は 1703 年から此処で夏季の政務を執ったことから、「承德離宮」、「熱河行宮」とも呼ばれて、「承德」は副都のような存在になった。2017 年からは 3



北京空港構内の長距離バス乗り場

区、1 市、4 県、3 自治県を管轄する地級市になっている。

避暑山荘は総面積 564 万平方メートル、周囲の城壁は 10 キロメートル、その中にある庭園は中国四大名園の一つとされ、1982 年には国家 5 A 級観光地となった。

山荘の北側と（武烈河を挟んだ）東側を中心に 12 の寺廟が山荘を取り巻いて点在しており、「外八廟」と呼ばれる。1994 年には「承德避暑山荘及其周囲寺廟」としてユネスコの世界文化遺産に登録された。なお、承德市には北京市との境界にある「金山嶺長城景区（国家 4 A 級観光地）」も世界遺産である。

### ■まずは、長距離バスで秦皇島へ

羽田空港を定刻の午前 9 時 10 分に出発し、北京空港に着陸、第 3 ターミナル E で指紋を採取され、入国審査の後、モノレールで移動し、手荷物を回収し、エレベーターで地上階に降りた。13 時前に長距離バスの切符売り場で、14 時発「秦皇島行き」の座席指定券を購入する（140 元）ことが出来てホッとした。

天気もまあまあで、定刻前に、入り口近くの座席に座った。運転席の頭上には、市内バスでは見掛けなかった 2 枚の貼り紙があった。「車内で（向日葵、西瓜などの）種子を食べることを禁止」、「車内で靴を脱ぐことを禁止」とあり、長年の生活習慣を一朝一夕に変えるのは易しいことではないだろうと感じた。





バス運転手の頭上に貼られた禁止事項

長距離バスの途中休憩はいつものサービスエリア（トイレと売店、食堂があるだけで殆ど人っ気がない）で1回のトイレタイムを取って、18時過ぎに秦皇島駅前にある長距離バスターミナルに着いた。

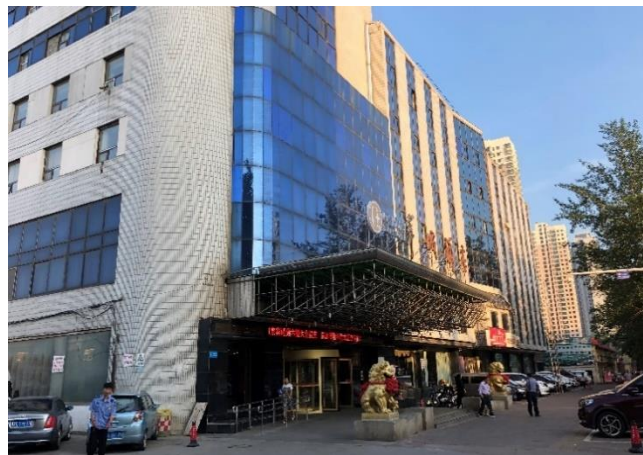
ホテル予約のために利用したアプリの情報に従えば、秦皇島駅正面から南に走る迎宾路に沿って1キロも歩けばホテルに着く筈なので、スーツケースを転がしながら歩き始めた。バスの停留所一つを通り過ぎ、10分余り歩いたところで、左手に建つ「羊城酒店」に着いた。外観や内装は小奇麗なシティホテルで安心した。

#### ■チェックインして知人と連絡

予約通り2泊の予定を告げてチェックインしようとしたが、500元の押金を要求された。大都市の大きなホテルでは、旅行社との予約に使用したクレジットカードを使えば、大概、押金の要求はされないのが、初めての場合だったら戸惑うに違いない。

このホテルは「舒适型」と説明されていたが、1日当たり100元から200元あたりのクラスらしかった。100元以下は「经济型」になるようで、ビジネスホテル相当というところだろうか。このホテルより高料金のホテルは「高档型」、「豪华型」、「四星级」などと記載されるようであった。

翌朝の朝食時刻を確認して部屋に入り、日本では使用しなかった中国製の4Gスマホを1年半振りで起動させてホテルのフリーWi-Fiに繋ぎ、中国人の知人らと連絡を取った。翌日の午前中に所用を済ませて、昼は知人らと会って食事をして、夕方には知人の日本人と会うことにした。夕食のために外出するの



秦皇島駅から直近だったホテル

も、ホテル内の餐厅を利用するのも億劫になったので、持参した軽食で良しとした。

#### ■秦皇島市の火鍋の威力

翌日、6月22日はビュッフェの朝食を済ませ、受付にタクシーを呼んで貰い「北戴河」に向かった。用件とは銀聯カードを作った中国交通銀行の支店でカードを再発行してもらうことだった。カード紛失は前年に大連から連絡してあったが、会話がままならず、ようやく目的を達することが出来た。

使い慣れた22番バスに乗り、「南戴河医院」で降り、知人らと合流し、以前、御用達だったスーパーの隣に建つビルの2階にある火鍋店に入った。現地での火鍋は初めてだったが、感動したのは舌や口内に感じる辛さではなく、目や喉に感じる辛さだった。辛みの成分が空气中に濃密に漂って、目はショボショボ（ヒリヒリ）、喉がゼーゼーという感じで、中国人の彼らも（四川省出身の人もいたが）必ずしも平気ではなさそうだった。日本から持参した美味しい日本酒をテーブルに出したが、芳醇な味わいも火鍋の威力の前に何処かへ消し飛んでしまった。

知人の日本人宅に寄り、承德市の地図を貰いがてら話を聞いた。夕食を食べて、22番バスで「北戴河駅」に出た。「秦皇島駅」行きのバスが目の前で出発してしまったので、鉄道で帰ることにして19:45発に乗車した（9元）。秦皇島駅に着いたのは9時近くだったので、「承徳行き」の長距離バスの切符を前日に買うことは出来なくなってしまった。（つづく）

●資料：『地球の歩き方 D03 北京 2016～2017年版』、株式会社ダイヤモンド社：2016

『タンゴ タンゴ タンゴ 情感 Sentimiento 織りなす魂のしらべ』  
を上梓して

大類 善啓

刊行挨拶

## ■タンゴとは何か？

「わりい」の会員の方々がタンゴと聞けば、たぶん「藤沢嵐子というタンゴ歌手がいたな」と思い出される方も多いのではないかと思います。

タンゴとは何かと説明していくと長くなってきますので、ここではひとまず、19世紀後半にアルゼンチンの首都ブエノスアイレスにやってきたイタリアやスペインの移民たちから生まれた音楽と踊りと言っておきましょう。

しかしタンゴの発祥については、アルゼンチンと、お隣のウルグアイがそれぞれ「自分たちの国こそタンゴ発祥の国」だと主張して、言い争いが絶えませんでした。しかし最終的には2009年、アルゼンチンとウルグアイ両国は手を結んで、＜タンゴ発祥の国＞であるとユネスコ世界無形文化財に申請し認可され、その論議に終止符が打たれました。

しかし北欧のフィンランドがそれに異議を唱え、フィンランドの映画監督であるアキ・カウリスマキが映画『白夜のタンゴ』を創り、もともとフィンランドの東部にいた船乗りたちが寂しさもあり、湖畔のダンスホールで踊りだし、そこからタンゴが生まれ、その船乗りたちが南米ウルグアイの首都・モンテビデオやブエノスアイレスの港町にやってきてタンゴが伝わったのだと主張しました。

## ■「憂鬱なる時代」にタンゴで救われた

私は高校時代からタンゴに親しんでいました。1960年代の初め、＜これがタンゴだ！＞というラジオ番組がありました。夜の八時半からの30分番組だったと思います。

1960年代の半ばは、私にとって、いわば“憂鬱なる時代”でもありました。高橋和己が『憂鬱なる党派』

という小説を発表した時代でもあります。この小説は1950年代の学生運動に傷ついた一部の学生の鬱々たる心情を描いています。

それから10年後、1960年の安保闘争が大衆的に盛り上がるも敗北。その挫折感が50年代の挫折した青年たちと情動的に重なっていたのです。そんな空気の中で過ごした学生時代、私は週に一度は神田神

保町に行き古本街を散策しました。そして、一息つくのが「ミロンガ」というタンゴ専門の喫茶店でした。

その「ミロンガ」でコーヒーを飲みながらタンゴを聴き、1冊か2冊ほど買った古本を開く時こそ至福の時間でした。しっとりとして流れてくるタンゴを聴いていると、なんだか憂鬱なる気分が浄化されるような気持ちになってくるのです。

自ら命を絶つ、という気持ちになるほど落ち込んでいたわけではありませんでした。 「どんなことがあっても生きていこう」

「どのような苦境になっても自殺などはしないで生きていこう」と思ったりしました。読者の中には、「何をたいそうな」と思われる方もおられるでしょう。まだ20代前半の若僧でしたが、しかしその時の気持ちに嘘偽りはありません。

タンゴの歌詞は、思いを馳せた女性に裏切られたり、仕事に挫折したり、夢破れた男の嘆き、祖父母がかつて生きてきた故郷を思うような詩が多く、決して楽天的な内容ではありません。しかし、だからこそ落ち込んでいた時に救われるのかもしれない。

## ■タンゴは人生を背負っている！

1990年代からタンゴ音楽とダンスが一体になったショー構成の舞台が世界で脚光を浴びました。ニューヨークでもパリでも人気になり、日本でも多く



『タンゴ』表紙;批評社刊、  
20023.2月20日発行(¥1,980税込)



の人たちがその舞台に魅了されました。そのアルゼンチンの本場のダンサーの中で最も影響力があったダンサーこそカルロス・ガビートでした。残念ながら彼は2005年に癌で亡くなりました。享年62でした。

実はその亡くなる3年ほど前の2002年の11月だったか、私はガビートにインタビューする機会に恵まれました。私はガビートに、タンゴダンス(社交ダンスのタンゴとは別物です、念のため)がはやり出した日本の状況、タンゴの心、タンゴダンスの真髄などについてインタビューしました。

その時彼は、「タンゴの歌詞を読めばわかるように、別れた女性と

の辛い思い出や嘆き、過去の哀しみや哀歓を歌っている。つまりタンゴは過去を背負っている。人生を背負っている。つまりタンゴは追憶で出来ている」と語りました。このインタビュー記事は2003年の『ダンスファン』1月号に掲載され、多くのタンゴファンから素晴らしいと評判を呼び、今でもその記事のコピーが踊る人たちに回覧されて読まれています。

### ■「苦勞すればタンゴがわかる」

サリー・ポッターという女性がタンゴダンスに魅せられ、『タンゴ・レッスン』という映画を創りました。その中にこんなシーンがあります。

ブエノスアイレスに行きタクシーに乗ると、ラジオからタンゴの曲が流れてきます。彼女は『ガージョ・シエゴ』ね、と曲名を言うと運転手は驚き、「出身は？」は尋ねます。サリーが「ロンドン」と答えると、運転手は驚き、こう言うのです。「精一杯生きるんだ。そして苦しめば、タンゴがわかるようになる」。

タンゴは大人の音楽なのかもしれません。苦勞知らずのお嬢さんやお坊ちゃまの音楽ではないのです。そんな彼らも人生を生き、苦勞を重ねてくるに従って癒されてくるのがタンゴ音楽と言っていいかもしれません。

### ■ぜひご笑覧のほどを！

拙著は2月初旬に出来上がり、刊行にお世話になった方々にお贈りしたところ、すぐに日本タンゴ・アカデミー名誉会長の島崎長次郎氏から電話が入り、

「改めて全文を通読して感銘したよ。タンゴの本質、心が何なのか、一般の人々にもわかるんじゃないか。今までにない本だよ」と絶賛していただき嬉しくなりました。

タンゴ通の仲間からも、「魂の込められたタンゴへの思いがひしひしと伝わってきます」「今までにないタンゴ論、タンゴファンの思いをプロが書くと、こうなるのか、と感じ入りました」。また、「『タンゴ タンゴ タンゴ』というタイトルが直にわかりやすく、帯の文章もインパクト大。装丁がワイン色で、踊り手の影を生かしたのもノスタルジックを誘い込み、一般

アストル・ピアソラのタンゴに魅せられたクラシック界の巨匠、ギドン・クレーメルやヨーヨー・マがピアソラ作品を競って演奏するようになり、ファン層に広がりを見せたとは言え、タンゴはまだマイナーな位置にあるようだ。しかしその音楽的な深い魅力、現代に生きる人々の琴線に触れるタンゴの心、真髄を明らかにした本書には、世界的なバンドネオン奏者である京谷弘司や小松亮太などへのインタビューも収録されている。**音楽ファン必携の書だ。**

### 裏表紙の帯

の方にも手にとっていただけるかも」というメールが届きました。

私が理事長を務める方正友好交流の会の会員でもある上野千鶴子(フェミニズムの旗手、東大名誉教授)さんからは、「タンゴは、なるほどディアスポラの曲、喪失の歌、大人の調べ・・・その通りですね」という便りが来ました。

ぜひ「わんりい」の方々にも読んでいただければ嬉しいです。会員の方々には、旧満洲から帰国した藤沢嵐子が決して<大連>での話をせず、「思い出すのも嫌」と言った彼女の内面世界に迫った<嵐子よ、安らかに眠れ <大連体験>を昇華した藤沢嵐子のタンゴに思う>と題した文章や、バンドネオン奏者・京谷弘司が1980年代に中国公演した時の思い出などを語ったインタビュー記事、世界的な指揮者であるブエノスアイレス生まれのダニエル・バレンボイムについて書いた書き下ろしの文章なども関心があるかと推察いたします。

小さい書店には置いていないかもしれませんが、取り寄せてくれと言えば入手できます。

またネットのアマゾンでも入手できるでしょう。また最近の図書館は購入図書のリクエストも受け付けます。リクエストをして、図書館の本で読んでいただくことも出来るでしょう。定価千八百円(税別)ですが、ご笑覧いただければ嬉しい限りです。どうぞよろしく願いいたします。



## ■189 話 1 銭なら助けなくていい!

超ド級のケチンボの話。

ある日、突然の豪雨があり、川の水嵩が増していたが、急な用事があり、彼はどうしても川を渡らなくてはならなかった。川の流れは速かったが、渡し船の費用を惜しんで、危険を冒して、独りで渡ろうと川の中に入って行った。ところが川の中ほどまで来ると、水流に押し流されて、水中の木にやっと捕まって、こらえていた。岸では彼の息子が、彼を助けるために渡し船の交渉をしていた。船頭は1 銭だせば助けに行つてやろうというが、息子は5 分しか出さないといい、値段の交渉は長い間続いた。父親は瀕死の状況にいながら叫んだ：「息子よ！ 息子よ！ 渡し船は5 分で十分だ。1 銭は出すんじゃないぞ」

息子は言う通りに交渉を進め、とうとう父親を助けることは出来なかった。

## ■第 190 話 酒を買う

お金が好きで、お金のためなら人を騙しても平気な、腹黒い、資産家の老人がいた。

ある日、彼は酒が飲みたくなり、家の雇人を呼びつけて言った：

「早く行って、いい酒を一瓶買って来い！」

雇人が行かずに立っているのを見て、彼は：

「早く行け！ 何で突っ立っているんだ！」

「まだ酒を買う金を貰っていません」

「金があれば誰だって酒は買える！ 金無しで、酒を買って来る奴こそ、有能な人間だ！」

それを聞くと、雇人は出かけていき、村の中を一回りして、間もなく、空の酒瓶を提げて帰って来て、テーブルの上に置いて言った：

「ご主人様、酒を買ってきました」

老人は、瓶が空なのを一目見ると、目をギョロつかせて、怒鳴りつけた：

「これは空き瓶じゃないか！」

雇人は、すまして言った：

「酒があれば、誰だって飲めます。無い酒を飲めてこそ、有能なお人と言えるんですよ！」

## ■第 191 話 酒を醸造する

商売人が二人、お互いに出資して、酒を醸造する相談をしていた。

A：「あんたは米を出してくれ。私は水を提供しよう」

B：「良いでしょう。あんたは水を出し、私が米を出す。ところで、酒が出来たら、どのように分配しましょうか？」

A：「私はずるいことはしない。酒が出来たら、私は提供した水だけを返してもらえば良い。残りは全部あんたのものにしてくれ！」

## ■第 192 話 着火する

昔、ケチな旦那がいた。ある日、小僧にマッチを買って来るよう、くどい程言い聞かせた：

「良いか、マッチは全部、ちゃんと着火するものを買って来るんだぞ。一本でも着火しないものがあったらだめだ！」

小僧が買って来たので、旦那は手に取って、何本か着けて見たが、どれも火が着かなかった」

旦那は怒って、小僧に言った：

「ちゃんと着火するものを買って来いと云ったのに、どれも着かないじゃないか！」

小僧は落ち着き払って答えた：

「旦那さんがちゃんと着火しなくちゃいけないと仰ったので、さっき全部付けて見ました。全部ちゃんと着火しましたよ！」





【わんりいの催し】  
皆様のご参加を歓迎します

♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体の力を抜いて気持ちよく発声しよう！  
声は健康のバロメーター！！

\*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：まちだ中央公民館 美術工芸室
- 日時：4月4日（火）10：00～11：30  
5月9日（火）10：00～11：30
- 講師：Emme [エメ]（歌手）
- 会費：1,500円（講師謝礼・会場費）
- 定員：15名（原則として）
- 申込：☎042-735-7187（鈴木）

~~~~~

\*\*\* 中国語で読む 漢詩の会 \*\*\*

漢詩で磨く中国語の発音！ 中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！

- 会場：まちだ中央公民館 視聴覚室
- 日時：4月30日（日）10：00～11：30  
5月は休講
- 講師：植田渥雄先生  
桜美林大学名誉教授
- 会費：1,500円（会場費・講師謝礼）
- 定員：20名（原則として）
- 申込：☎090-1425-0472（寺西）

Email:ukiuki65jpp@yahoo.co.jp  
(有為楠)



■ 4月・5月定例会 代表宅

- ▼4月 6日（木）13：45～
- ▼5月 11日（木）13：45～

■ ‘わんりい’ 発送 三輪センター

- ▼5月号 5月1日（月）
- ▼6月号 未 定

☆☆ 編集後記 ☆☆

今年の桜はいつもにも増して早く咲きました。今年の開花宣言は、記録上、過去一番早い記録タイでした。その後の高温続きで、これまた最速の満開宣言がありました。

昔、桜の花は入学式を寿ぐ花でしたが、今は卒業式を彩る花になりました。最近は、一日の寒暖差が拡大したり、季節の変わり目が曖昧になったりと、私たちの日常生活も少なからず影響を受けています。これらは皆地球温暖化の影響だと言われます。

地球規模で見れば、両極の氷の融解、高地の氷河消滅による海面水位の上昇、気候変動による耕地の減少、食糧不足の予測など、人類の存続を脅かすような事態が進行しています。科学技術の進歩によって、一刻も早く温暖化阻止の方策が執られることを期待します。

~~~~~

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎します  
年会費：1800円、入会金なし

郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい  
10月以降の入会は、当年度会費1000円

■問合せ：044-986-4195（寺西）

‘わんりい’ 282号の主な目次

|                                                 |    |
|-------------------------------------------------|----|
| 寺子屋 四字成語(61)『出類拔粹』……………                         | 2  |
| 「日译诗词」(31) 姚遂〈散曲〉憑欄人……………                       | 3  |
| 「漢詩の会」報告(64) 孟郊『游子吟』……………                       | 4  |
| 「中原」雑感(30)「二七大ストライキ」百周年……                       | 6  |
| 中国の神話・伝奇物語(22)「風塵三侠」……………                       | 8  |
| 「風洞山」……………                                      | 10 |
| 「シューマンとメンデルスゾーン」(2)……………                        | 12 |
| 「避暑山荘・外八廟」駆け足旅行(1)……………                         | 14 |
| 刊行挨拶・「タンゴ タンゴ タンゴ<br>情感 Sentimiento 織りなす魂のしらべ」… | 16 |
| 「中国の笑い話(54)」……………                               | 18 |
| みんなの広場……………                                     | 19 |
| ‘わんりい’の催し・お知らせ……………                             | 20 |